

4 高等学校現場から中退問題を考える

埼玉県立戸田翔陽高等学校長 管野吉雄

はじめに

埼玉県立戸田翔陽高等学校は、Ⅰ部（午前部）Ⅱ部（午後部）Ⅲ部（夜間部）を持つ、昼夜開講3部制・総合学科高校である。さまざまな理由で中途退学（以下「中退」という。）する生徒が少なくない。本校にとって中退の問題は深刻な問題である。残念ながら、中退後は、学校と中退者との関係は切れてしまう。その後、中退者はどうなったかを把握することもできない。自分の人生をしっかりと歩いているのだろうか。一人一人の個人にとっても、家庭にとっても社会にとっても、その人が自分の人生をどう生きるかは、重要なことである。

中退問題を、個人、家庭、学校という個別の問題に帰着しないで、社会全体の問題として捉えることが必要である。この度のアンケート結果から、私なりの考えを述べたい。

1. 高校を辞めたときの状況

(1) 中卒後の進路希望

「高等学校に進学したかった」と回答した者の割合は、82.5%である。高校進学に夢と希望を持って入学したにもかかわらず途中で辞めてしまったという生徒が多いことになる。高校を始め、社会全体で将来を担う若者の夢と希望を実現させる方策を考えなくてはならない。

(2) 辞めた理由

辞めた理由で一番多かったのが、「欠席や欠時がたまって進級できそうもなかった」である。これを防ぐためには、学校側の努力事項として、修得単位の累積ができる単位制の導入又は履修と修得の差を設けて何単位か修得できなくても進級を認めるようにするなど、進級基準の弾力化を図ることである。子どもたちに望むことは、欠席や欠時を少なくするという強い意思を持つことである。休まない、遅刻をしないということは、社会に出て仕事をする際にも大切なことである。

二番目に多かった理由は、「校則など校風があわなかった」である。これを防ぐためには、学校選びをするときに、学校の校則などの校風を調べておくべきであると思う。また、入学した以上、その学校の校則などを守るということは、就職する際にも必要な考えだと思う。自分の目標を達成するためには、自分に諸条件を合わせるのではなく、

自分を諸条件に合わせるという努力も大切である。

三番目に多かった理由は、「勉強がわからなかった」である。これを防ぐ対策として、学校側では、習熟度別学習などの授業改善、小学校、中学校を含めての基礎学習の定着である。たとえば、数学（算数）、国語、英語の基礎力が全く定着しないまま高校生になっている生徒が少なくない。先送りをするのでなく、そのステージ、ステージにおいて基礎学力を確実に身に付けさせることが大切である。

四番目に多かった理由は、「人間関係がうまくいかなかった」である。これに対して、高校でできることは、ホームルーム、部活動、学校行事で人間関係を構築する機会を数多く設けることである。また、カウンセリング体制を充実・整備することである。

(3) 辞めることについて相談した相手

相談相手は、「親」に次いで多いのが「高校の先生」である。中退者にとって高校の先生は、相談相手になることは少ないと思っていたので、うれしい誤算であった。と同時に高校の責任の重さを改めて自覚した。先生が生徒から相談を受けたとき、場合によっては辞めた後でも、生徒と先生がお互いに相談し合える豊かな人間関係を保っていかなければならないと思った。特に、早期に学校を去った生徒に対しては学校としても何らかの援助が必要である。中退者を学校や社会から断ち切ってはいけない。

(4) 高校を辞めた後の進路決定時に、苦労したこと

「適切な情報を得る方法がわからない」と回答した者が多かった。国や地方公共団体は、様々な社会サービスの情報を発信してはいるのだが、残念ながら、国や地方公共団体の取組が、支援を必要とされる者にほとんど知られていない。特に、地域若者サポートステーションは、ほとんど知られていない。せつかくの機関、人材が有効に活用されていないことがわかった。

相談所の名称の工夫も必要だと思う。110番、119番に相当する番号がほしい。相談内容によって相談場所を割り振る機関も必要である。若者は情報収集手段としてパソコンや携帯電話等を頻繁に使っているので、ホームページの活用、携帯電話用サイトの活用も積極的に取り組んでほしい。

中退者は、一部の学校に集中する傾向があるとの指摘もある。そのような学校では、ハローワークや地域若者サポートステーションの方々を呼び、中退する前から、生徒と就学や就職の紹介をする方とのゆるやかな顔なじみの関係を形成しておくことが大切である。

2. 現在していること

(1) 仕事を探している

「働いている」、「在学中」の者はよいが、「仕事を探している」、「家事・家事手伝いをしている」若者が多いのが気になる。仕事を紹介してくれるハローワークや地域若者サポートステーションの周知を徹底してほしい。併せて、技術・技能・学力を身に付けさせ、雇用される人材に育てる必要がある。また、「働いている」と回答した者の77.2%の者が、「フリーター・パートなど」と回答している。不安定な仕事に従事していることが心配である。

(2) 今の仕事をしている理由

「働かないと生活ができないから」、「遊ぶお金がほしいから」と回答した者が多い。働く理由がこれでは仕事は長続きしない。生活支援・経済支援も必要であるが、働くことに希望を見いだせずには仕事は長続きしない。希望を持たせる指導が重要である。

職業訓練、キャリア教育、資格取得は、正社員・正職員雇用に結び付けるために重要であり、文部科学省が進めようとしている小中高のキャリア教育の充実を期待する。

(3) 別の高校に進学したきっかけ

「高卒の学歴がほしいから」と回答した者の割合が、76.2%である。学ぶ意欲と熱意がある者にはいつでも学び直しができる機会を与えたい。高校に対しては、再入学、転学がしやすいシステム、やり直しができるような柔軟な対応が求められている。近年、本校のような昼夜開講二部制や三部制高校がその役割を果たしている。

3. 今後の見通し

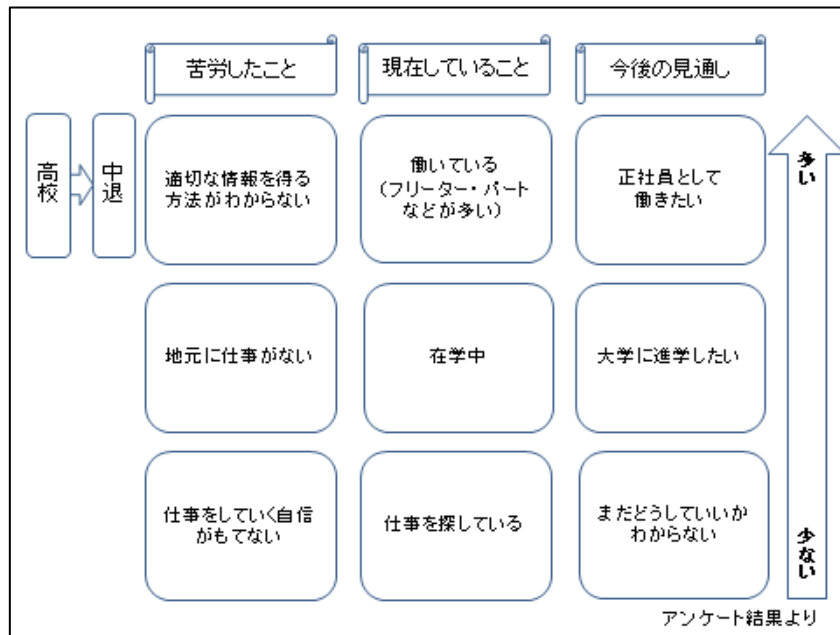
(1) 今後の進路希望

「正社員として働きたい」と回答した者が多い。逆にみれば正社員として雇ってくれない社会の厳しさが垣間見える。「どうしたらよいかわからない」者も多い。勤労観・職業観など、自立に必要な思考能力を形成する必要がある。貧困から救うためにも、失業リスクの高い者に対して、学びの場・訓練の場を確保してあげたい。

(2) 自分の将来への不安感

「たいへん不安」、「やや不安がある」と回答した者の割合が、69.6%である。将来に不安を感じている者が多い。中退者の話し相手となり精神的安定感を与えるカウンセラーの配置も必要である。いのち支えるプロジェクト「ひとりで悩むより、まず相談を」（内閣府自殺対策推進室）は、自殺防止だけでなく、中退者へのメッセージでもある。

○中退した後苦労したこと→現在していること→今後の見通し



4. 資格や支援の必要性

「中退後、高卒の資格は必要だと考えたか」に、「はい」と回答した者の割合は、78.4%である。また、「高卒の資格を得るために、あと何単位必要か」を知らない者、「高等学校卒業程度認定試験」を知らない者も多い。中退リスクの高い生徒には、高校の先生がそれらのことを指導しておくことが大切である。中退した後でも、これらの情報を伝える支援体制が必要である。特に、中退時には、重要な情報としてしっかり伝えておきたい。中退後も学校と中退者が何らかの接点を持つことが大切である。

5. 保護者以外に親しく話ができる大人

日本では、学校の存在意義が大きい。相談相手としては、何といたっても学校の先生がキーポイントである。先生の一言が生徒の人生を左右することも多い。生徒の将来を考えたあたたかい言葉掛けが重要である。また、誰もが情報提供のチャンスを得られる相談機関等も必要である。中退すると様々な人間関係が切れてしまいがちであるが、中退後もどこかにつなげる豊かな人間関係（家族、職場の上司・同僚、親戚、先生、地域の人々など）が大切である。

6. 中退者が必要としているもの

特に、相談できる人、相談できる施設が必要である。就労に限定した支援では効果が薄く、もっと早期に相談・教育を含めた総合的な支援が重要である。

中退者には、弱者（家族貧困、不和、虐待、不登校、精神疾患、発達障害等）が多いとの指摘もある。中退した者が、教育・訓練をいつでも受けられる（手当支給あり）システムが必要であり、就学や就職など次のステップにつながる手立てを社会全体で考えなければならない。住む場所を失って、漫画喫茶、ネットカフェで泊を重ねている者も少なくないと聞いている。緊急に宿泊できる宿を用意してほしい。経済的に追い込まれて非行の道にいつてしまう中退者も少なくないと指摘もある。

7. 低い自己肯定感

中退者の中には、自己肯定感の低い者が多い。意欲・自信を高めるために、ボランティア活動、社会体験活動、自然体験活動などの体験活動・成功体験を通して、達成感・成就感を味わわせたい。良い体験活動は、自信とやる気を醸成する。学校と会社をゆるやかに結びつける社会体験・職業訓練の場がほしい。

8. 我慢できないほど腹がたつ

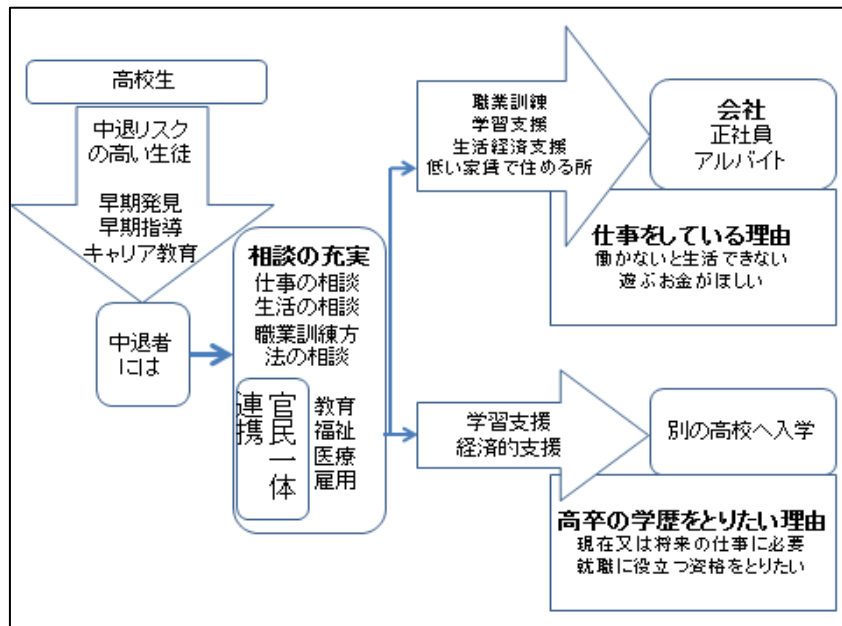
「我慢できないほど腹が立つことがある（よくある、ときどきある）」と回答した者の割合が、47.8%である。自分にとって都合の悪い原因を、他人のせい、社会のせいにする腹が立つものである。他人に責任を負いかぶせない生き方が大切である。経験上、中退者には、注意されるのを嫌がる者が多いと思う。あっさりと学校を辞めてしまう生徒、それを簡単に認める保護者。何事においても、我慢力が必要である。

9. まとめ（イメージ図）

（1）若者を自立させる流れ

高校中退のリスクの高い生徒には、早期発見、早期指導が重要である。そして、やむを得ず中退した者には丁寧に相談活動を行い、次の就学・就労に結び付けてあげたい。

○若者を自立させる流れ

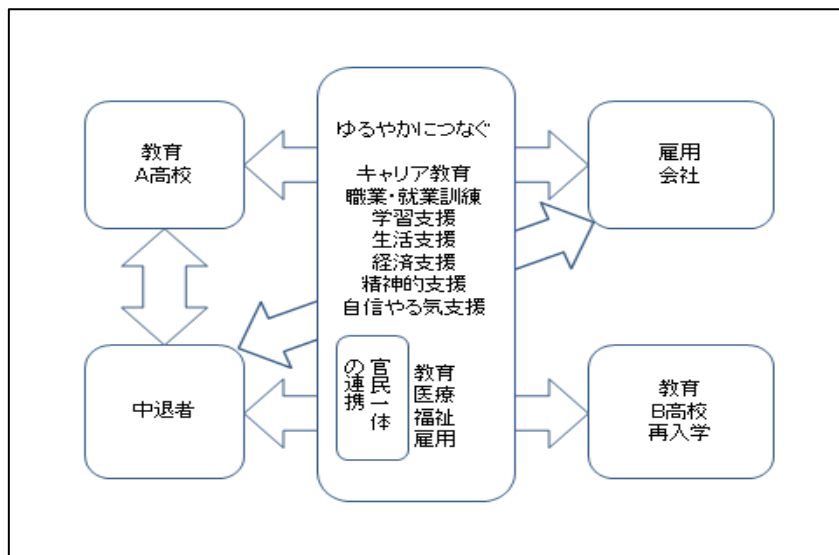


(2) 官民一体の連携～継続的かつゆるやかにつなぐ～

中退者の多い高校では、在学中から他機関と連携（教育、医療、福祉、雇用等の官民一体連携）し、継続的かつゆるやかな関係を構築しておくことが大事である。

関係は強すぎても、弱すぎてもうまくいかない。ゆっくりでゆるやかなつながりがうまくいくと思う。お互いコミュニケーションを豊かにとりながら、顔をつなぐことが必要である。各機関は連携し、生徒の進路希望に従って、進学指導、職業訓練等を行う。経済的に追い込まれている者も多いので、公的な資金援助、住宅支援も必要である。また、学校・社会から断ち切られ、自分は一人ぼっちだと感じてしまうことが多いので、周囲の人々による精神的ケアも必要である。

○各機関が継続的かつゆるやかにつなぐ



10. 中退者を支援する6つの提案～学校現場から考えること～

(1) 中退者が気軽に遊びに来ることができるあたたかい学校づくり

先生と生徒が気まずい関係のまま中退してしまうこともある。やむを得ず中退してしまう場合でも、中退者がいつでも学校に来て相談できる人間関係を学校全体で構築するあたたかい学校づくりを推進する。

(2) 中退者向けマニュアル（就労編・就学編）の作成・配布

中退時に「履修・修得一覧表」「高等学校卒業程度認定試験とは？」「編入学、再入学の方法」「ハローワークとは？」「地域若者サポートステーションとは？」等について解説したマニュアルを渡して説明する。

(3) 地域四者会議

中退者をいかにして支援するか、また、いかにして自立させるかについて、地域の学校、医療、福祉、雇用の四者による情報交換会を定期的を開催する。

(4) 中退体験者が語る中退リスク講演会

中退した後の「生活・就学・就労で困ったこと」について、中退リスクの高い高校生を対象に、中退者が体験談を語る会を開催する。

(5) 19歳以上の者を対象にした特別募集～入試制度改革～

埼玉県の定時制高校では19歳以上の者を対象に、作文と面接を資料にして選抜する特別募集を実施している。定時制だけでなく全国全ての高校で特別募集を実施し、再チャレンジしたい者に学びの機会を提供する。

(6) 午前は職業訓練、午後は労働、夜は学習を行う全寮制高校を設置

自分で働くことで学習費・宿泊費・食費等を賄い、同時に規律ある生活習慣及び就学・就労につなげる力を身に付ける高校を設置する。